

## 編集後記

さる二〇一〇年六月十二日に開催された武智鉄二シンポジウムに関連する二つの論考を収録出来たのは、研究所の喜びとするところである。

ひとつは歌舞伎役者で人間国宝の坂田藤十郎氏に、武智歌舞伎についての回顧の追加インタビューをお願いした。もうひとつは本学教員四方田による映画監督としての武智をめぐる論考である。来年生誕百年を迎えるこの芸術する巨匠は言語文化を考える者にとって、つねに大きな指標であり続けている。それを確認できた点で、シンポジウムは有意義であった。

なお本シンポジウム終了後、半年を待たずして、中村富十郎氏と狂言方の茂山千之丞氏が泉下の人となられた。謹んでお二人のご冥福をお祈り申し上げますと

もに、若い世代の研究者・批評家の間で、武智鉄二をめぐるさらなる研究と論議が活発化することを期待したいと思う。

(岡本・四方田)



言語文化研究所の二〇一〇年度の活動についてここで報告しておきたい。通常の活動としては「ホメーロス輪読会」「記号哲学研究会」「言語学基礎講座」「タイ語講座」など、多彩な十の研究会・読書会が例年通りつづけられている。こうした息の長い取り組みのほか、今年度も数多くの興味深い催しがおこなわれた。

まず特記すべきは二つの大きなシンポジウムである。十一月十三日に開催された「デューラー受容史500年シンポジウム」は本号の特集テーマとしてその内容を完全収録し、企画者の大原まゆみ氏（文学部芸術学科教授）に執筆者の紹介をお願いした。また六月十二日におこなわれたシンポジウム「武智鉄二・伝統と前衛」については二つの関連論考を本号

に掲載し、共同企画者の岡本章氏および四方田犬彦氏（ともに芸術学科教授）に解説をお願いした。時代も国も領域もまったく異なる二人の芸術の巨匠に関して、それぞれに充実した議論の場を提供できたことは、本研究所にとって欣快の至りである。

また二〇一〇年度は音楽関係の催しが相次いだ年であった。秋の大きなイベントは九月二七日にオクスフォード大学リシカン・カレッジ聖歌隊を招いて本学宗教センターとの共催でおこなわれた「明治学院×オクスフォード 合同演奏会」である。「さくら」からヘンデルの「ハレルヤ」にいたる多彩な曲と美しい歌声は、チャペルを埋めた多くの聴衆を魅了した。六月四日にはジョン・エルウィス氏によるレクチャーコンサート『ダウランドの涙』が開催された。本誌には明治学院大学大学院博士課程在学中の加藤拓未氏によるその翻訳と解説を掲載した。年末の十二月十一日には昨年引きつづいてのクリスマス企画として、本学

出身者であるハーブ奏者寺本圭佑氏と新進気鋭のフィドル奏者大竹奏氏を中心に

「ケルティック・クリスマス——ケルトのお話とダンス、伝統音楽」が開催され、また演奏会ではないが、十二月十三日にはワイマール音楽大学教授ヘレン・ガイヤー氏による講演会「十七・十八世紀ヴェネツィアの養育院と音楽」がおこなわれた。さらに年が明けた二月十九日には樋口隆一氏（芸術学科教授）の指揮による「北ドイツの巨匠デイトトリヒ・ブクステフーデー——夕べの音楽——」が催された。パッサにも多大な影響を与えたドイツ・バロック音楽の巨匠の作品がこの

ような形で紹介されることの意義はきわめて大きいと思われる。

音楽関係以外にも二つの講演会が催された。シネ・カノンの設立者である映画プロデューサー李鳳宇氏による「日本映画の現在と未来」（十月十九日）と、「紅衛兵」ということばの生みの親で作家・歴史学者の張承志氏による「中国の言語と文化」（十一月九日）である。張承志氏が講演のために準備された原稿は本誌に掲載させていただいた。

最後にこうした催しごとにはよらない特別の寄稿について説明しておきたい。当研究所には西脇順三郎が心血を注

いで書きためたギリシア語と漢語の比較に関する貴重な原稿が大量に保存されている。本学名誉教授である工藤進氏の論考はその原稿調査に基づいてフランス語で書かれたものだが、本誌掲載にあたって「ホメーロス輪読会」の講師である生田康夫氏に翻訳していただいた。生田氏には「ホメーロスの声」についての論文も寄稿していただいた。また富山英俊氏およびマイケル・ブロンコ氏（ともに英文学科教授）による宮沢賢治の英訳は本誌の第二四号、二六号などに掲載された一連の訳業の延長上の貴重な成果である。

（朝比奈弘治）